

## 4 1 年度，探検活動をふりかえつて

渡 辺 彰 二

私達がリーダー権を得ていた年代で、クラブの目的としたものの一つは、探検という意義をより巾の広い視野で把握していただき、一層立派な探検活動を実行できるよう導く事であった。

単的に言えば、国内から国外、つまり海外へという地域的な壁を超越した考えにのっとり、さらに考え方を島国根生から脱し、より広い視野から探検というものを考え、接していかなければならないという事であった。

それまでの部員の海外に対する考えというのはほとんど、遠征はしたいが、全く初めての者ばかりなので、言語、渡航手続、費用 e t c. に対して、全く無知で月世界探検のように大げさに思い込んでおり、又今迄に何回となく計画を立案したが、学校側の許可が下りないとか、隊長になる人が渡航できなくなったとか……。実に下らない理由をつけて、全く自分自身に対して偽りの精神があったようである。

私に言わせれば、自分自身がどのような事情の下におかれようと突き進んで行く精神の欠如と、中途半端な探検心しか抱かれていなかったとしか思われない。

もっとも自由奔放にできる学生の特権というものを生かさないという事は、実に情けない現状であった。

そこに於て、部員の探検心というものは次第に通見化され、又は到底近づく事のできない理想を追い、自分達の立場との差が余りにも甚しいと思ひ込み、失望を感じていたのであろう。

そこで、そういった考えを打破するためには非

でも海外遠征を遂行しようという部員が集まり、着々と計画を進行していった。端目からは色々な陰口をいう者が出て来たが、そんな事に対して少しも屈しないという強く結束されたチームワークで突進していった。

結局、第一次フィリピン海底—民族調査、台湾総合調査と立案した計画、すなわち、今まで夢にまで見ていた海外遠征計画は着実に進行し、完遂された。

この二つの海外遠征計画に対して最初から最後まで、いや終わってからさえも批判は出たが、こういう事は、脱却から躍進といった時期には、当然保守派と革新派のような二つの様相が現われ意見を戦わすのが当り前の事である。しかし今回は甚だ残念なことに、批判といっても陰口だけにしか終わらず、我々を真正面から批判するものがなかった。

もっとも、今まで単純、卒直且つ素直さというものを持っていなかったからであろう。

ここで主張したいのは、私がフィリピン遠征に行った時に強く感じた事であるが、日本人というのは多分、人間本来の純粹さというか、素直さといったものを表面に出す事ができない二重性格を持っている。その良し悪しは別として、探検活動を心ざす者にとっては、純粹で素直さを自由に表現できるような態度で接しなければならないのではないだろうか？

そこに於ては各種の批判、批評も出、議論を戦わし、お互に理解することが出来、すぐれた計画、すなわち傷れた活動ができるだろう。

我々の行った海外遠征の結果がどのようなから心配であったが、何んとか我々の考えていた初期の目的、自由な渡航、つまり、国内、国外という分け隔てのない状態に於ける探検が、現在の部内に萌芽して来ているという事は一応の成功と見てよいだろう。

それは、43年の春から夏にかけての第二次フィリピン學術調査、第一次ボルネオ學術調査と計画も立案され、着々と行動に移されている事もその現われの一端であろう。

しかし、ここで考えなければならないのは、既に、自由に海外へ行けるという基盤ができたのだから、ネコモジャクソンも海外遠征すればよいというのではなく、広い知識と何ものにも屈し難い体力、及び精神と周到なる計画の下で、より学術的な、また少しでも社会に貢献できる様な探検活動を行うよう努力しなければならない。

特にそこでは、自分自身に厳しい態度で接し、探検資格があると思われる段階で行っていただきたい。

そうでなければ、海外へ行った所で、実に狭い視野でしか探検活動ができず、又単なる物見客に過ぎず、外貨の無駄使いだけに終わってしまうことになるだろう。ここでは海外へ行く場合の心構えも述べているが、国内でも同様なことが言えるだろう。

ここで少し付加しておきたい、それは探検部というものを、単に4年間で終わるものである故、レジャー的、つまりできるだけ楽な方向に進み、

4年間というものを楽しめばよいという頹廢的な傾向が現われてきているように思われる。

そういう傾向を持っている者に言いたい、『探検部に何を求めて入って来たのか？ 何がしたいのか？ 探検部というものをレジャーの道具として考えていないのか？』探検部というのは、あくまでも探検を行う部なのであり、それ以外のなにものでもない。短い人生で、もっとも自由にできる二度とない学生時代にもっともハツラツとした情熱、若さをぶっつけて活動しなくて将来何ができよう。目先の利益、快樂ばかりを追っていると年老いてから後悔する破目になるだろうことは目に見えている。

レジャー的な事なら学生時代でなくても、いつでもできるのに。

昔のことわざにもあるように、苦勞がなくて人格の向上があるはずがない。

レジャー的な事ばかり追っていると終いには現実逃避というか、骨なしの社会人としかならないという傾向が多分に含まれていると思われる。

もし、レジャー的に探検部を考える者がいるなら、さっさとクラブをやめ、そういった者同志でリクルをつくれればよいのだ。

最後に 言述べよう。第二章から資料はどんなクラブに入っていましたか？と尋ねられた時に、「私は関大の探検部です。」と何んの躊躇もなく、胸をはって言える人になってほしい。

わたなべ・しょうじ(商学部学生)